町史の窓(9)

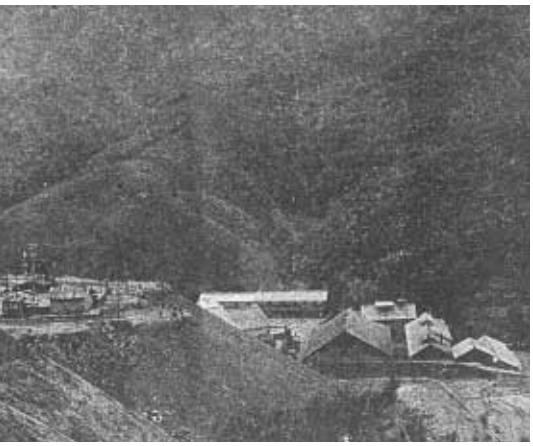
古代の銅山

岡山大学助教授
今津勝紀

備中国は、古代の日本でも長門や豊前とならぶ有数の銅の産地でした。ここで産出された銅は、周防国の鋳銭司という役所に送られ、貨幣の鋳造に当てられました。備中の銅山の名前を示すものは、古代の史料には見えないのですが、恐らく吹屋銅山であることはまちがいありません。今回は、古代の銅山についてお話ししてみたいと思います。

古代の場合、律令法で「国内に銅や鉄を産出するところがあれば、官が採掘をしていない場合には、皆々が私的に採掘することを認める。もし銅や鉄を国家に納入するのなら、各自の負担すべき租税を控除する、もしくはそのまま租税として納めることを許す」（雑令九国内条）と規定していました。備中の銅山は、まさに官が採掘する銅山にあたります。一〇世紀に『延喜式』という律令国家のこまごまとした決まり事がまとめられますが、それによると備中国は、毎年八〇〇斤（五三六キロ）の銅を鋳銭司におくることとなっていました。また備中の銅山には「採銅使」という役人が置かれていました。この採銅使が、備中における銅の採掘の責任者です。採掘には「役夫」が動員され、彼らには銅の生産高に応じて銅一斤（六七〇グラム）につき四束弱の稲が備中の国衙から支給されました。

こうした官営鉱山は、文献にみえるところでは、美作国の鉄山の事例があります。『日本霊異記』下巻、第十三には美作国英多郡の「官の鉄を取る山」があり、国司が「役夫十人」を徴発し、鉄山で鉄を採掘させたところ、坑道が崩れ一人が生き埋めになったという話がみえます。この場合、国司が役夫を使役して、鉄の採掘にあたらせるわけで、官営の鉄山であった可能性があります。美作も古代有数の鉄の産地ですので、国家的に鉱物資源の確保が目指されていたところでは、官営方式が多かったのではないかと思われます。



銅山に話を戻しますと、最近、まさに古代の官営銅山そのものが発見されました。残念ながら備中ではないのですが、長門国の長登（ながのぼり）銅山跡です。長登銅山では銅の採掘・精錬が行われていたことが発掘調査の結果わかりましたが、なかでも木札に文字を書いた木簡の出土により、銅山のようすが知られることで画期的なものです。木簡にかかれた年紀には、奈良時代初期の和銅年間から天平年間にかけてのものがのこされています。そして、この長登銅山の銅滓（からみ）の成分は、一九八八年に奈良の東大寺大仏殿の西側の谷から発掘された大仏鋳造用の銅合金の成分と一致することがわかりました。東大寺の大仏は、

田植えを体験

五月二十八日、大野田ノ河内地区で、〝「やりたい」をおもいっきり〟（ふれあい農業体験）を行いました。新聞等で募集し、倉敷市、岡山市から、六家族（十九名）が参加されました。

前日の雨で天候が心配されましたが、当日は心地よい風が吹く穏やかな日和となりました。はじめに田植えを体験。

ほ場へ着くと、新緑と風になびく稲の苗が参加者を出迎えました。はじめに地元の方々から説明を聞き続いて手ほどきを受けながら田んぼへ。裸足になり、コシヒカリの苗をもっておそるおそる入っていきました。約一時間で五畝を超えるほど植えることができました。場所を畑に移動してスイカ・カボチャ・サツマイモの苗を植えていきました。

体験が終わると、興産集会所で昼食。おむすび、タケノコの煮物など食べながら、話に花が咲いていました。

倉敷市から参加の中野さんは九ヶ月の息子さんといっしょでした。「まわりがコンクリートで囲まれた市内に住んでいます。今日はとても気持ちよかったです。何と言っても空気がおいしいし、まわりの緑に感動しています。」

家族四人で参加した岡本さんは「昨日の雨で大きなてるてる坊主を作りました。裸足で田んぼに入ったときはとても気持ちがよかったです。アイガモを放してあるところが今度は是非みたいです。」

聖武天皇の発願によるもので、まさに「国銅を尽くして」と形容される国家的大事業ですが、その事業にも長登産の銅が使われました。

長登銅山では、銅の生産施設が発見されています。精錬のための炉、炉の材料となる粘土の採取跡、坑道からの排水施設などで、長登では採掘から精錬までの工程が行われたと考えられています。おそらく、これらのほかに、鉱石の破砕、選鉱の作業場、倉庫や管理施設などのさまざまな施設が、銅山一帯の谷筋や山の斜面に広がっていたことでしょう。

木簡の内容も興味深いもので、調という税目で納められた周防国の塩や、庸という税目で納められた長門国の米の木簡が発見されており、長登銅山が税金を投入して運営する官営鉱山であったことを物語ります。

また「和炭」「炭」など、炭の種類が記された木簡もみつかっています。古代では石山寺を作る際の記録によるとこれらの炭を区別していたようです。「(表) 日下部色夫七月功・(裏)大殿七十二斤枚一」という木簡は、日下部色夫が某年の七月分の銅の出来高を記したものと考えられます。「大伴部広麻呂出炭四□」・「忍海部志豆米出炭十八石」と記されたものもあり、それぞれの労働はきちんと伝票や帳簿により管理されていたと思われます。

この出炭というのは、精錬用の炭を運ぶ作業ですが、注目していただきたいのは、「大伴部広麻呂」が男性であるのに対し、「忍海部志豆米（おしぬみべのしずめ）」が女性だということです。長登銅山の木簡には、このほか、精錬作業に女性が従事していた可能性をしめす木簡もあります。炭焼きもこの女性が行っていたことが考えられます。先の美作の鉄山の例では、坑道に入るのは役夫であり、古代の場合これは男性を意味しますが、それ以外の場所では女性も同じように動員され働いていたのでしょう。

ちなみにこうして銅山で働いていた人々には、食事が支給され、「採銅料」が支給されるのですが、長登銅山から出土した木簡のなかには「逃」と記された伝票風の木簡もあり、逃げ出す人も多くあったようです。備中の銅山では、寛平元（八九九）年に備中採銅使である弓削秋佐と備中国衙との間で「採銅料」の支給方法をめぐって紛争がおきています。弓削秋佐は、備中に赴任する前は、周防国鋳銭司の役人で、そののち長門の採銅使に任じられていました。彼は、備中に赴任して、出来高に応じて役夫の給料を直ちに支払うことを要求しています。現場を熟知した労務管理方式なのでしょうか。このように長登銅山のようすは備中の銅山を考える上で参考になります。

備中吹屋吉岡鑛山

節句は笹巻きで

大野田ノ河内地区は六戸の農家で水稲生産組合を作り、アイガモ農法に取り組んでいます。有機無農薬米・減農薬米（コシヒカリ）を生産しています。

秋には、稲刈り・野菜の収穫を予定しています。哲多姫（トマト）の苗をおみやげに帰路につきました。

旧の節句（六月六日）には家の軒に菖蒲と蓬を置いたり、菖蒲湯に入ったり、柏餅を供えた家庭も多かったことと思います。

森脇虎三さん（花木）と奥さんの都さんは昔から伝わる笹巻きを作られました。熊笹を三本持ち真ん中に米の粉の団子を置き笹で包み、ゆがらで結わえます。その形はまるで鶴が立っているように見えます。それを十本束ね湯がきます。

「子供の頃は作っているのを見るのが楽しみでした。見よう見まねで覚えましたよ。笹巻の他にもカヤ巻き、柏の葉で巻いたものもありました。昔は米が貴重品じゃったから、小麦粉、高キビ粉も使ようたよ」と話しながらも手が休むことはありませんでした。「米の粉をかいて団子にし、できあがったものを湯がくのがわたしの役目」と都さん。「以前は湯がいた汁で足を洗うとムカデやハミが食いつかん」と言われていたそうです。森脇さんは笹巻きだけでなく、昔ながらの季節の行事を大事に受け継いでいかれています。